

Field Note

## 環境と民具 再び世界常民について



中村 政則 (事業推進担当者 / 神奈川大学大学院・教授)

### オーストリア・チロル地方とベルリンの民俗調査

2004年9月、佐野賢治、木下宏揚、私の三人は、パンの生活誌や『アルプスの谷に亜麻を紡いで』(筑摩書房、1986)などの著作で知られる舟田詠子氏の案内で、オーストリア・チロル地方とドイツ・ベルリンの博物館をたずね回った。彼女は20年以上にわたってオーストリア民俗誌を研究しており、ドイツ人も驚くほどドイツ語に堪能である。舟田さんの通訳のお陰で、博物館長や音声研究所長などへのインタビューもすべて順調にいった。2週間近い調査行であったが、チロル地方の農家では昔ながらのパンの作り方を実演してもらった。グラーツ、リエントツ、インスブルックでは、4つほどの民俗博物館をたずねた。館長や案内人の説明を聞き、展示物をじっくり見たときには、オーストリア民俗学の伝統の厚さを実感した。さらにドイツに行き、ベルリンのヨーロッパ文化博物館をたずねた際には、舟田さんが我々の「非文字資料の研究」テーマをあらかじめ伝えてくださっていたこともあって、コンラッド・ヴァンヤ(Konrad Vanja)館長の話は、すこぶる興味深いものであった。とくにヨーロッパ文化博物館の創設者ルドルフ・ヴィクショウ(Rudolf Virchow)の説明を聞いたとき、私はルドルフの博物館にかけた情熱、理念に感銘を受けた。

ルドルフは民俗学者であると同時に、医学者(解剖学)でもあった。彼は「人間と自然を統一した宇宙」を理想の世界とし、健康と自然環境を一体とした学問を創ろうとした。ルドルフは、貧しさが病気を生むと考え、人間はどこに住み、どこに寝て、何を食べているかを調べた。また人々は何を使って仕事をしているか、いろいろの工芸品、民具を集めた。たとえば小麦やライ麦を刈り取る場合、平らな畑では長い柄の鎌を使うが、傾斜の急な畑では短い草刈鎌を使う。要するに「環境に合わせて道具がある」というのだ。次に道具の装飾は地方によって違う。皿、花瓶、コーヒーカップにしても、チーズ作りの箱や曲物の弁当箱にしても各地域に特有の模様があしらわれている。同博物館では金持ちのユダヤ人から資金を

提供してもらって、各地の民具を体系的に集めたという。こうしてルドルフは「文化の表現としての道具」という考えにたどりついた。

医者でもあったルドルフは次に病院をつくった。院内感染に一番気を使ったという。次いで政治家にもなった。一般的にいて学者は研究・分析はするが実践を伴わない。自己の理念を実際政治の場で実現しようというのであった。

ルドルフの死後、博物館に比較の方法が入った。それまでは異国趣味からトルコや中国などから古い陶器や珍しい人形を集めたりしていたが、19世紀に入って、田舎と一般の人びとへの関心が強まった。民具収集の動機は工業化、産業革命で次第に消えていってしまうものも集めたが、ただ旧いからというのではなく、普通の人々が日常的に使っているものを集めた。民俗衣装についても、祭礼のときに着るものよりも、労働着を集めた。博物館が大きくなるにしたがって、保管していくものが増えていった。カタログの作成が複雑になり、紙製品・木製品・ガラス製品・金属製品など素材別にカタログを作成し、保管についても素材別に保管する方法を考えた。それが今日まで続いているという。

ヴァンヤ館長の話聞いた後、我々は2時間近くにわたって、収蔵庫を丁寧に見せてもらったが、これが実にすばらしい。皿、花瓶、コーヒーカップ、人形、ワッパ、ガラス製品などが地方別にきれいに保管されており、地方別の比較がわかるようになっていた。収蔵ケースは、特注ではなく、市販のケースを購入したという。保管物が増えても簡単に買い足すことができるから、というのであった。今まで私は参観者として外から博物館を見ることは何度もあったが、内側から博物館を見るのは初めてであった。以上の見聞は、その後、日本の博物館や民具の収蔵ぶりを見るときに参考になった。その具体例を次に記しておきたい

### 福島県只見町の民具

2004年6月と11月、我々第4班のチームは福島県南会津

郡只見町をたずねた。同町には8,000枚以上の民具カードが保存されている。しかも、それらのカードは只見町教育委員会や地元の民俗研究家の指導の下に、地域住民が一体となって作成したものである。住民参加の民具の収集と膨大なカードづくりは全国でも珍しく、『福島民友』や『読売新聞』福島版に何回か取り上げられた。我々が調査に入った時にも『福島民友』(2004年6月18日)が早速記事にした。

全国でもめずらしい住民参加の民具収集とカードづくりがなぜ可能になったのか。飯塚恒夫氏(昭和9年生、当時、社会教育主事)は、その動機を次のように語った。「昭和39年に文部省主催の研修があり、民具分類の体系化したハンドブックを作った人の話を聞いた。この分類なら我々でもできると思った。普段何気なく使っている民具が学問の対象になると知って感動した。当時は高度成長期で、農家の改築ブームがおこり、古い家が次々と取り壊され、民具がどんどん捨てられたり、焼却された。また昭和44年8月12日、只見町に未曾有の集中豪雨が襲い、民俗資料が散逸した。今なら間に合う。町史編集室が中心になって、民具の収集・整理が始まった」。詳しい経過は省くが、この呼びかけに応じて、古老や主婦たちは民具を集め、洗ったり、刃物のさびを落としたりして民具を整理し、2年がかりでカードを作った。

私たちは住民側のリーダー横山哲夫(大正14年生、79歳)、馬場惇(昭和6年生、73歳)、渡辺幸生(昭和8年生、71歳)三氏から、2回にわたり合計7時間前後の聞き書き

を行ったが、そのとき三氏は「民具が生き返ってきたなあ」「民具が語りかけてくるようだった」という印象的な言葉を述べた。また会の名称を「只見の民具を語る会」ではなく、「只見の民具と語る会」としたのも、そのためだと言った。このカード作りとその資料化については、網野暁氏(COE研究員・PD)が年報第2号『人類文化研究のための非文字資料の体系化』(2004)で書いているので、むしろここでは夏のヨーロッパ民俗調査と只見調査との関係に絞って、私見を述べておきたい。

それは、ベルリンのヨーロッパ文化博物館長コンラッド・ヴァンヤ博士から聞いた「環境に合わせて道具がある」「文化の表現としての道具」という言葉である。私はこの言葉が気に入っていて、先ほどの三人にも、この話を伝えた。これを聞いた馬場惇氏と新国勇氏(只見町教育委員会)が、自然を大切にす先祖の知恵について語ってくれた。以下はその一部である。

「今の人は自然を征服するといって色々なことをやっているが、昔の人は自然を恐れ、自然に逆らうようなことはしなかった。自然に合わせて道具をつくったものだ」。たとえば、くわ(鍬)の柄をつくるにも、木の枝を利用して一本の木で鍬の柄をつくった。これをクワガラというが、木釘でつないだ鍬と違って丈夫で長持ちした(写真1)。二股の木を利用して、脱穀や豆落としに使うマオトリ(写真2)を作ったり、三またの木を利用して農具のカツアボウ(写真3)を作ったのも先人の知恵だ。

豪雪地帯のこの地域では、カンジキは無くしてはならな

写真1

クワガラ〔鍬柄〕  
(台)長さ:33.0cm 幅:13.0cm  
(柄)長さ:88.0cm  
これに野鍛冶で作った鍬先をはめる。柄の勾配と太さは自分の体にあわせて木取りをする。



写真3

カツアボウ〔カツア棒〕  
カノ(焼畑)で刈り払った草をかきあげる。カクサボウとよぶ地域もある。



写真2

マメオトシ〔豆落し〕  
長さ:55.0cm 幅:13.5cm  
大豆、小豆、ソバなどの雑穀類を脱穀する。マトウリとマドリとよぶ地方が多い。





履物だが、降ったばかりの“ぼほ雪”(新雪)は柔らかく腰までつかるので、大きなカンジキを履いて道を踏み固めなければならない。これをツルカンジキという(写真4)。ところが雪が固まってくると堅雪は危険なので、滑り止めを付けた小さな丸カンジキを履いて歩く(写真5)。これは現在でも同じである。また雪の多い只見地方ではブナや杉の木が雪圧で根元から曲がっている。これをネマガリ(根曲がり)というが、農民たちはこの根曲がりの木を利用して、コウガイやモミヨウシボウという道具をつくった(写真6)。耨押<sup>のぎ</sup>しや芒おとしに使われた。鍬の刃の付け方にしても、農地の斜面に応じて、角度を変えた。まさしく只見町の農民は昔からドイツの農民と同じく「環境に合わせて道具をつくっている」のだ。これは私にとって新鮮な驚きであり、発見だった。

#### 世界常民

私は本誌第4号で、「雲南省で考える」という短い文章を書き、世界常民という言葉を使った。その主旨は、雲南省博物館の民具・装飾品や写真などの展示を見ているうちに、「世界中どこの民衆も同じことを考え、同じような道具を作るものだ」という実感を抱いたからにはほかならない。11月のオーストリア調査のとき、グラーツの野外民家博物館で唐箕<sup>とうみ</sup>を見つけたときに、正直言って、私は「あっ」と驚きの声を上げた。神奈川大学の歴史民俗資料学研究科の内藤大海氏(2004年度「日本における唐箕の発達」で学位取得)から、よく唐箕の構造や技術的発展の話聞いていたので、私の関心も自然と唐箕に向かっていたのである。よく見ると、オーストリアの唐箕(写真7)と日本の唐箕は外見も仕組みもほとんど変わらない。ちなみに、同じ4班の橘川俊忠氏がフランスの博物館で撮影した唐箕(写真8)は、内藤氏によると江戸時代の農書「農術鑑正記」にある「篩付の唐箕」によく似ているという。このタイプは近畿地方に分布しており、国立民族博物館の近藤雅樹氏は「近畿の半唐箕」として纏めている。内藤氏は、この唐箕は一番口のみで一番口が本体の底部に開口しており、中国、タイの唐箕にも存在するという。

では只見地方の唐箕はどうかというと、(写真9)のように民具カードには次のような説明文が付いている。書いたのは、先述の住民側リーダー横山哲夫氏である。

「穀類の選別用具で、粳、粟、ヒエ、そば、大豆、小豆など上の口から入れ、右手で把手を廻して風を起こし、穀物を選別する。正常なものは手前の口から、不成熟な

ものは向こう側の口から落ちる。ごみやちりは前方の口から吹き飛ばされる。」

学者が書く文章よりやさしく的確である。しかもこの説明文はオーストリア、フランス、中国の唐箕にもほぼそのまま通用すると言っていいだろう。「世界中どこの民衆も同じように考え、同じような道具を作るものだ」という私の感慨は、唐箕についても当てはまるのである。他方、ベルリンの博物館収蔵庫で見たワツパ(弁当箱の一種)にしても、木製・竹製の違いがあるとはいえ、新潟県蒲原や岐阜県飛騨で見たワツパとほぼ同じ形状をしている。まさしく民衆レベルで考えると、先進・後進もないのである。日本の歴史や民俗の研究で、「この技術は西洋や中国から伝わって来たもの」という技術伝播論がよく使われるが、本当にそうなのだろうか。雲南省、ドイツ、福島県只見調査で得た知見から判断すると、そういう常識自体まず疑ってみたいほうがよさそうである。

「必要は発明の母」という言葉があるように、民衆(農民、大工、職人、鍛冶など)は生産や生活の必要から、我々が想像もできないような創意・工夫を発揮していく。これは民族や国境の違いを超えて、あるいは農業、漁業、山稼ぎなど生業の違いを超えて当てはまる人類の智慧であるまいか。

私は、世界は先進・後進もなく、どこも同じ式の「文化相対主義」の立場を表明しているのではない。むしろ近代科学技術や近代学術の面での先進・後進の違いはやはりあると思っている。しかし、民衆や常民レベルでも先進・後進があると思うのは、知識人の独りよがりではないかと考えるようになった。

柳田国男は『民間伝承論』(1934)の中で、世界民俗学という言葉を使った。一国民俗学を確立してのちに、世界民俗学に向かおうという提言であったが、未完に終わった。しかも、柳田のいう世界民俗学は、いわば比較伝承学であって、世界民具学あるいは比較民具学でもない。また世界常民という言葉は、柳田にはない(佐野賢治氏の教示による)。

私の「環境と民具」の研究は、始まったばかりであって、今後何処へ向かっていくかは分からないが、「環境に合わせて道具を作る」という生活の知恵は、ヨーロッパ、アフリカ、アジア、南米、北欧など世界各地にも見出されるはずだ。そこにはどのような同時性、共通性、差異性があるのか、知りたいと思う。





写真4

ツルカンジキ  
 長径：63.0cm  
 短径：34.0cm  
 輪は地竹、フリオは藁・麻  
 などで出来ている。



写真5

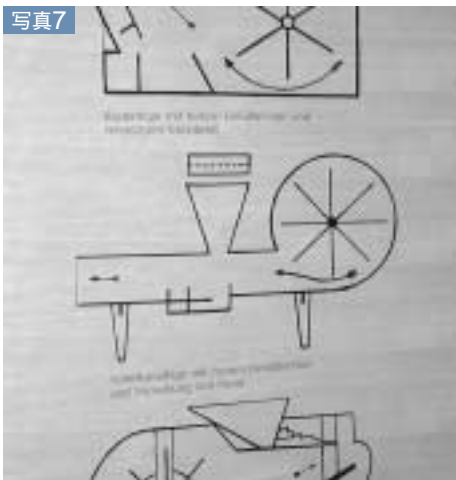
マルカンジキ  
 直径：33.0cm  
 新雪の歩行及び雪道踏みに  
 使用する。



写真6

モミヨウシボウ〔籾ようし棒〕  
 センバで扱った穂切れや、籾につ  
 いている芒(のぎ)を打ち落とす。

写真7



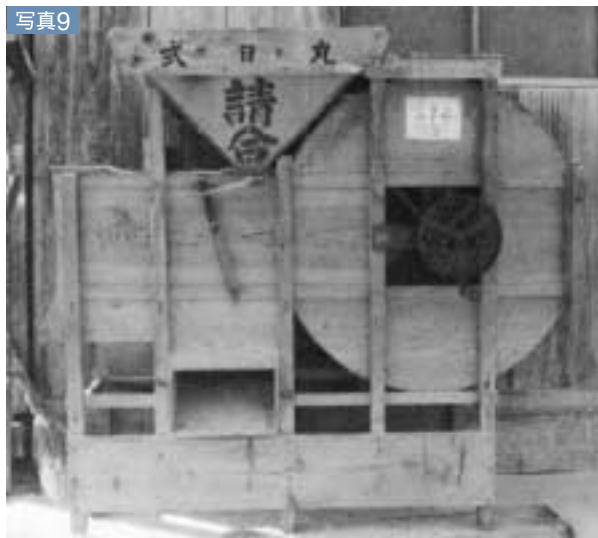
唐箕の概念図(オーストリア・グラーツ  
 シュテューピング野外博物館蔵)

写真8



唐箕(フランス・カーン ノルマンディ博物館蔵)

写真9



唐箕(只見町梁取)

鷲山義雄著『会津の民具』より